




「ね、ねえイヅちゃん
お願いだから正気に戻って？
こんなの、こんなのおかしいよっ」

「正気？」

「じゃありさは正気なの？」

「え……え。」



「さっきから、色々言ってるけど
一度も逃げようともしてないよね？」

「そ、それは……」

「羨ましそうに見てたよね？
あたしのおまんこに出入りしてるご主人様のおちんぽ♥
ホントは自分も犯されたいんでしょ？」

「そんな、ムム……」

「もう自分に言い訳しなくたっていいの
嫌がっても受け入れても同じ結果になるんだから」



「んっ♡ うんうっ♡」

おっぱいに男の指が食い込んでくる。

乱暴で、強引で、嫌なはずなのに——気持ちいい。

「にしてもこのエロシスター服エロいな
下は紐パンだし」

「そんなにお好きなら

あたしも着ましようか?」

「それもいいかもな

まずはコイツを堕としてからだけど」

んっ♡

「花恋の言ってたとおり
ホントにエロいガキだな。

こんな状況なのに乳首ビンビンで感じてやがる」

「やめ、いやあ♡

んいらっ♡

引っ張り、ないでえ♡」

硬くなった乳首を摘まみ上げられて

目の前がくらくらっと白く染まる。

自分の身体も支えられなくて

男に体重を預けてしまう。

キゅ♡

Love♡

は♡♡♡



(ずっぞっの……当たってる……)

服越しにお尻に触れるその感触から目を逸らせない。

(さっきイヴちゃんにあんなに射精してたのに……)

硬くて、大きい。


イヴを貫いていたときの外見が感触を補完する。

視界の外にあるはずなのに、

その色とカタチがはっきり見える。

「はぁ……はぁ……っ♡」





「リサったらご主人様のおちんぽ
欲しくてたまらないみたい♥」

「そんなことっ……」

「私、悪魔なんかの……んんんっ♥」

「素直になれないリサには
特別に魔法をかけてあげる♡」

「なに……するつもりなの……？」

「それはかけてからのお楽しみ……♡」



「テンプターション」



（なに、かけられたの……？）

頭、ふわあ、って……

なにも……

かんがえ、られない……♡

「はあ……♡ はあ……♡」

（かんがえ、られるのは……

これ……この、硬いの……♡

ちんぼ、ちんぼ♡）

「今かけたのはあ、

悪魔族専用の、素直になれる魔法♡」



「すなお、うらやま……」

「いい表情になったね、リサ♡
お色直ししてあげる……♡
それにしても下品なおっぱいね♡
あたしよりデカいんじゃない？」

「ふあ……♡ んっ♡ んっ♡♡」

「服のサイズもキツキツで収まらないし
ま、これでいっか♡
淫乱らしさが出るでしょ♡」

たぶらっ♡



「コレがほしいんだろう？」

「あ……♡」

「ちんぽ……♡」

「そう。」

「今、君が欲しくてたまらないちんぽだよ」



「ほらリサ……」

欲しいなら素直におねだりしなきゃ」

「ちんぽ……ちんぽおっ♡」

おねがい、おねがいですう♡

ちんぽ、ちんぽちょうだいっ♡」

「さすがは花恋の魅テンプテーション了だ

元々淫乱なだけかもしれないけどね」





「んあっ♡ はぁ♡

ちんぽ……ちんぽおっ♡」

「うっわ、ガンギマっでんじゅん
大丈夫？」

「もう、無理っ♡

ちんぽっ♡♡ おちんぽはしろのお♡」

「リサちゃんって処女？」

「ははは……♡」

「やっぱりね」

「オナニーしまくってるでしょ」

「なんで……」

「見ればわかる」

「お前は花恋以上の」

「どうしようもないマゾメスだ」



「いつもマンズリこくとき
なにをオカズにしてるんだ？」

「それ、はあ……」

モヤがかかって
うまくまわらない頭でも
それを告白することだけは拒絶していた



「コイツが欲しいんだろ？」

「あ……♡ ああ♡」

「これからお前の処女喪失の相手になる悪魔ちゃんほどよく見て、匂いも覚えるんだ」

「はあ……♡ ああ……♡」

濃密な——濃密すぎるオスの匂いが鼻を抜ける
想像の何十倍も臭くて、
想像の何百倍も芳しかった





何度も、何度も、
妄想だけはしてきた状況シチュエーション 況

だけど現実はそのよりもずっと——濃い

イヴちゃんにも、男の人にも見られてるのに

無意識のうちにアソコを掻き混ぜてしまう

手が止まらない

止められるわけがない

二人の視線に晒されて

いつもどおりにくちゅくちゅと音を立てる

「で、いつもはなにをオカズにしてる？」

「ホントのニューフェイスは
リサがしてほじらして
してもらってますよ♡」

「言ってるだけマックス」

（あ、あ、あ……♡
全部、全部見抜かれてる♡）





「わ、わたし……」

えっちな、格好して……」

男の人に、えっちな目で、見られて……」

見られるだけで、興奮してえっ」

「それでっ……」

「……」

「誘ってるんだろ、って」

強引に、押し倒、されてえっ」

レイプっ」

「こりゃまた、想像以上の淫乱だ」

「じゃあ今日は夢が叶うんだ」

よかったね、リサ」

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡



「妄種のちんぽと比べて
俺のちんぽはどうだ？」

「すけえ、すけえ♥
想像してたのより、ずっとお♥
このちんぽで犯されたらこのお♥」



「んっ♡ はあんっ♡ おおんっ♡

こんなのっ♡ 無種♡

頭の中っ♡ 種まき♡

「悪魔族のちんぽはいいなっ♡」

「イーン♡

目も眩しい♡

千回千回♡

おお♡ ぽおお♡

クッ♡

クッ♡

ブルッ♡

ブルッ♡

んっ♡

クッ♡

クッ♡



「リサったらひどい顔
獣みたい♡」

「花恋も似たようなもんだら
雑魚マンコ同士でマウント取って楽しいか？」

「んおおっ♡ ほおっ♡
んうううっ♡」

オ
キ
ユッ

オ
キ
ユッ

オ
キ
ユッ

オ
キ
ユッ

オ
キ
ユッ

オ
キ
ユッ

オ
キ
ユッ



「なありサ

お前の妄想では

いつも最後はどうなるんだ？」

「おおっ♡ ほおおおっ♡

そりえっ♡ そりえはあっ♡」

「妄想のとおりにしてやるよ

答えろ、リサ」

アキユッ

トキユッ♡

キョッ♡

キョッ♡

ビクッ♡

ズッ

はっ♡

ビクッ♡

キョッ♡



「はぁ……♡」

はぁ……♡

はぁ……♡

らぁ……らぁぁ……♡

これ、らじょう、はぁ♡」

「なにがダメなの？」

あんなに気持ちよくなると

ご主人様のちんぽはただらておられて♡」

「おね、がい……かれん、ちゃ……♡

さっびの、魔法、解いてえ♡

ごん、ごん……おかし〜、ごんごん♡」

「リサったらなに言ってるの？」

「なに……♡」

はぁ……♡

はぁ……♡

「ふふっ♡

魅了の効果時間はとっくにすぎてるわよ♡」

「ん〜……」

「嘘じゃならわ

さっき乱れたたのはリサが淫乱なだけ♡

でも気にすることないのよ

メスがらんぼに勝てるわけないんだから」



「ちがう……ちがう……

嘘……嘘……

わたし……私は……

そんな……」

接続が切断されました

「はぁ……はぁ……はぁっ♡」

ログアウトしてしばらく経っても、
心臓がバクバクと暴れていた。
部屋の温度はまだ肌寒いくらいなのに、
身体の火照りが収まらない。

「んっ……♡」

指先が触れただけで、
ショーツからぐちゅっという音が出る。

「こんな……濡れてる……」

無理矢理……犯されたのに……」

思い出しただけで、キュンキュンと子宮が高鳴る。



——ホントにエロイガキだな。
——こんな状況なのに乳首ビンビンで感じてやがる。

あの男の言葉が蘇って、
手が自然と胸をイジる。

「ああ♥
乳首、ビンビンになってるう♥」

あの男にされたことを、記憶の中から再現する。
胸を揉んで、乳首をつねると、

「こんな……風、に……あんっ♥」

雷のような快感が乳首から全身に抜けて、
火照りは収まるどころか熱を増していく。
お漏らししたみたいに濡れたショーツを脱ぎ捨てて、続ける。



——さて……じゃあ下の具合はどうかな？

「あ、ああ……♡」

嘲るようなあの声を思い出しながら、
束ねた指を挿入れる。

「んああ♡」

あの男の指よりも細くて、柔らかい指が、
ぐちゅぐちゅと自分の膣内を掻き混ぜる。
いつもどおりの——私の日課。





私は、発育が早い方だった。
背はそんなに高くないのに、胸やお尻ばかり大きくなった。

小学校高学年になる頃には、同級生と比べて、
明らかに女性的な体型になっていたし、
スケベなことしか考えてない同級生からは、
いつも見られて、オナネタにされていた。

中学を過ぎた頃には同級生だけでなく、
周囲の大人までもがいやらしい目を向けてきた。



友達はみんな、そんな男たちに嫌悪の感情を向けていた。

——愛里紗可哀想。

——男って本当最低。

私も、そんな友達の言葉に頷いていた。
——だけど——



——本当は、イヤじゃなかった。
舐めるような、好色な視線。

妄想の中で自分が汚されているという事実。
それらは私を興奮させることはあっても、不快にはさせなかった。

でも、それが普通じゃななことはわかっていて、
だからまわりに同調して、普通を装っていた。



そんな私にとって、グリモアファンタジーは救いだった。

現実だったら普通じゃない、露出の多い服装も、
ゲームの中なら自然にできる。
ステータスが優秀だから。
可愛くて気に入っているから。
そんな理由をつけて、胸を見せつけるような装備を選んだ。



男性プレイヤーには優しくするようにした。

ちょっと優しくするだけで、男たちはいやらしい視線を向けてきた。
このあとで自分がオナニーのオカズにされるのだからうと思つくと、
興奮して——それを想像して、オカズにしていた。

それが、誰にも言えない私の秘密。

それなのに、あの男は、一目でそれを見抜いた。

「イ、くっ——♡」

あの男の顔を、
そしてあの感触を思いだしながら、達する。
でも、足りない。

いつもは一度達すれば弱まる火照りが、
収まるどころか加熱される。

「なんで……」

本当はわかっている答えから目を背けて、問いかけた。
直後、スマホが震えた。



「メッセージ……?」

送信者の名前を見た瞬間、心臓が跳ねた。

「花恋ちゃん、から……」



「さへインメロウさへ満足してならんぞ」

「なんで……」

わかるの……？

そんな、口にすら出してない疑問さえも
見透かしたみたいだ、

「私やアンタみたいなマゾメスが、
自分のことを支配してくれるおちんちんに出会って、
それ以外で満足できるわけならもの」

「あ……」

「ねえ、リサ。」

ゲームの中だけじゃなくて、

現実でもおちんぼで支配されたいでしょ?」

「それは……私……」

返信できずにいる私に、

だけど花恋はメッセージを送り続けてくる。

「アンタも、私と同じ、マソメスなんだから」

「あ……」



「そっか……。
それが……マゾメスの普通なんだ……♡」

「住所教えて鍵を開けてなさい」

「答えたらもう、取り返しはつかない。
そんな確信があった。
だけど——」

「んっ♡♡♡」

「フェ……っ♡」





「二十分も掛からずに着くわ。
好きなだけおまんこほっぺして待ってななだ」

「はぁ……はぁ……あ、あ♥」

「そんなにチンポが欲しいのか？
リサ——いや、愛里紗」

「はい……欲しい、です……♥」

「おちんぼ、ください……♥
マゾメス愛里紗のリアル処女、奪ってください♥」

「良いぜ。」

「お前が待ち侘びてたコイツをくれてやる、よっ！」





「あんっ♡んああうっ♡」

「あいつは愛里紗？
はじめての生チンポは？」

「あゝ♡
うおっ♡うおっ♡
あゝあゝ♡♡♡♡♡」

ハグッ♡

チンポ♡

チンポ♡

ハグッ♡

ハグッ♡

チンポ♡

チンポ♡

チンポ♡



「もう取り返しがつかならぬから文相おさるの。
ゲームの中より、ずっとナイでしょっ。」

「ほひ♡ さいら、れひる♡
これ、があ♡ ご主人、様あ♡」

「ええそらよ。
リサの淫乱おまんこで、レッかり覚えるの。
オスに媚びる方法をね♡」

「たが♡」

「たが♡」

「キュン♡」

「キュン♡」

「カク♡」

「カク♡」

「カク♡」

「カク♡」



「ズズズズズズ♥
おっ♥んおおおんっ♥
っおっおんっ♥
牛乳を搾るおんっ♥
おんっ♥おんっ♥
おんっ♥おんっ♥」

「そろそろ射精すぞ。
おんっおんっ」

グワッ

グワッ

グワッ

グワッ

グワッ

グワッ



「おまんこ♡
子宮♡
ご主人様のザーメン、くらひやい♡」

「いいのか？
ゲームと違って、
本当に妊娠するかもしれないぞ？」

はっ♡

はっ♡

キゅん♡

キゅん♡



「おおおっ ♥ んおっ ♥
あついのおっ ♥ ザーメンっ ♥
注がれてえっ ♥
イクイクウウウツ ♥」

ハッハッ

ニルル

ニルル

ハッハッ

ハッハッ

ニルル
ニルル
ニルル

ハッハッ




広大なフィールドを持つグリモアファンタジーの内部には
人があまり寄りつかないような場所もある。
今、私がいるのもそんな場所のひとつだった。

「はぁ、はぁっ。」

ああ………嘘みたらだ。

あのリサちゃんとかやれるなんて……」



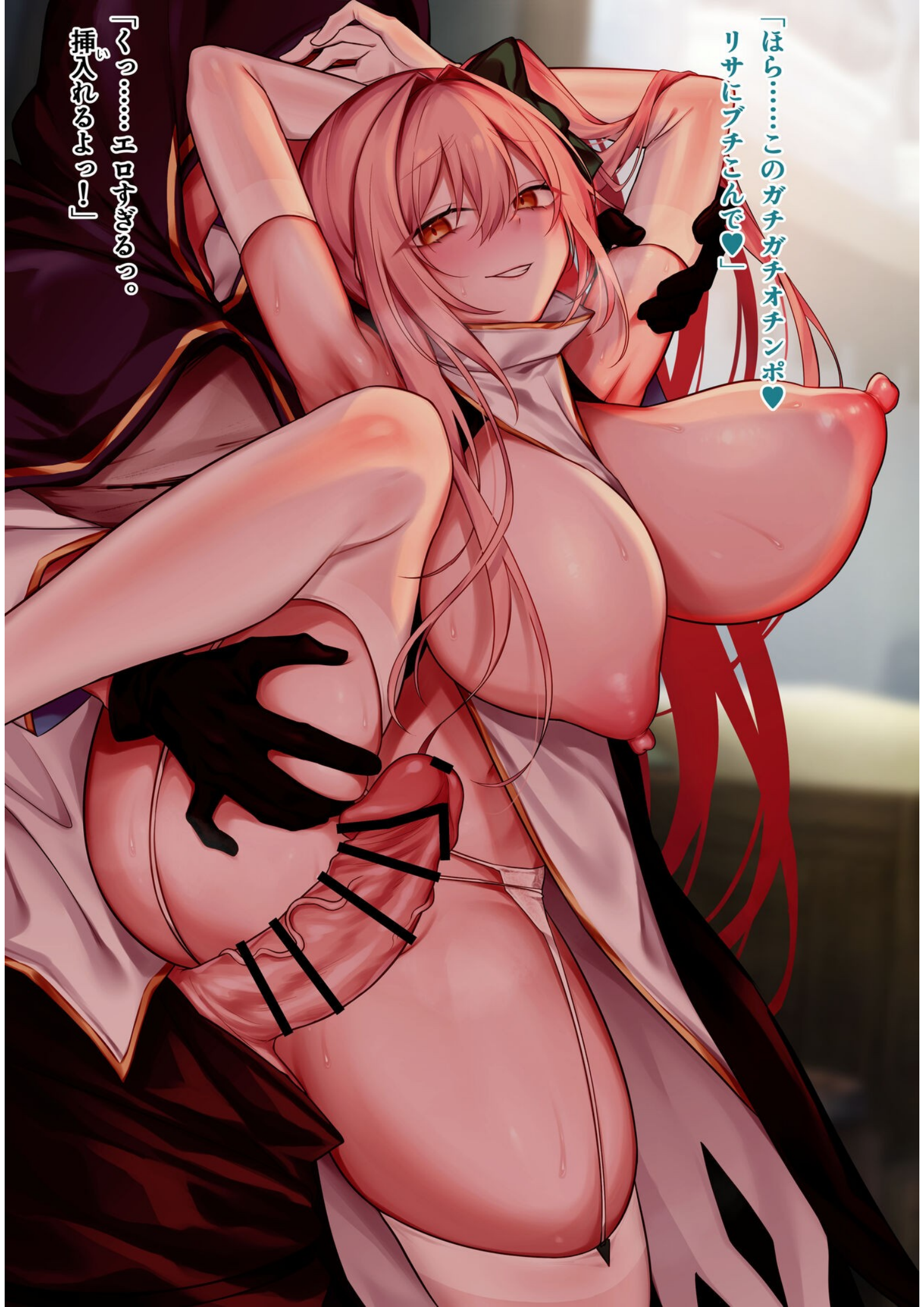
熱くて荒い吐息が吹きかけられる。
以前の私は嫌がらなきやいけなかった。
下心を隠そうともしない態度。
だけど今は、それが心地良い。
だって私はマゾメスだから。
男の人のズリネタにされて、性奴隷にされて、
それが普通だって気付いてしまったから。

「あんっ♥ 鼻息荒すぎです♥
そんなにガツつかなくても逃げたりしないのに♥」

オマンコに押しつけられたチンポが硬くなる。
ゲームの中とは思えないくらいリアルな欲望の熱が伝わってきて、
私のオマンコからもエッチなジュースが溢れていく。

「ほら……このガチガチオチンポ
リサにブチこんで♡」

「く………エロヤねえな。
挿入れるよっ！」



ぐぢゅっ♡

「んいっ♡

チンポキたあっ♡」

ブルンッ

ピクッ

ズッ

チンポが挿入はいしてくると、頭が真っ白になる。
自分を偽っていた頃には得られなかった、本当の充足。

「はあ、はあっ……
リサちゃんの膣内^{ナカ}、すっごい……
なんていやらしい娘なんだっ……」

私の身体のおちこちを撫でまわして、
揉みしだきながら、彼は腰を振りはじめ。

ハッ
ハッ

ハッ

ハッ

ハッ
ハッ

ハッ
ハッ

ハッ
ハッ
ハッ

「あぁっ！」

リサちゃんっ！

リサちゃんっ！」

ご主人様にレイプされたあの目から、私は変わった。
ううん、本当は変わってはいないのかもしれない。
見て見ぬフリをやめて、本当の自分を受け入れただけ。

だから今日も、私は売春をする。

前みたいに真面目なゲームの攻略なんてほとんどしてない。

したとしても、それは真面目な女の子プレイヤーというブランドを保つため。

「射^で精^だるっ！
射^だ精^だすよっ！」

「あっ♡ あっ♡
膣^{ナカ}内に射^だ精^だしてえっ♡」

はっ♡

はっ♡

ブルッ

ビクッ♡

フッ♡

フッ♡

フッ♡



「ほ、ホントにナマでいいんだねっ？」

「イイっ♥ イイからあつ♥
リサの子宮にザーメンどびゅどびゅしてえっ♥」



「あぁっ！」

リサちゃんっ！ リサっ！ リサアッ！」

熱い欲望が私のアバターに注ぎ込まれる。
本当の名前も、現実での容姿も知らない男の欲望。



「ああ……すごかったよ……
リサちゃんも気持ちよくなってくれたかな？」

客の言葉に、当たり前障りのない返事を無意識に返しながら、
私は注ぎ込まれた熱い欲望の感触を味わう。
私は今——シアワセだった。

「これが……女の子のおっぱい……」

「んふっ♡もしかして、女の子にするのはじめて？
童貞さんですか？」

「あ、ああ……」

「ふふっ♡」

「じゃあ私が筆下ろししてあげますね♡
セズリばかりこいてた童貞チンポ♡」



「うわ……やわらかっ」

「んっ♡ 手つき、やらしら♡
リサのおっぱい、ぐちゃぐちゃっ♡
チンポも、当たってるっ♡」



「逆ナンって、ホントにあるんですね……
美人局とか、そういうのじゃないですよ？」

「違いますよお♡
私はあ、ただのマ・ゾ・メ・ス♡」



最初は確かに、ちょっと怖かった。
なんだかんだでログアウトすれば、
アカウントを消してしまえば、
なかったこととできるゲームの中とは違う。
密室で、男の人に押し倒されたら逃げられないのだから。

だけど――。





すぐにわかった。

そうして使い潰されるかもしれないスリルが気持ちいい。

むしろ、そうされたいとすら思ってる。

だから、逆ナンは私の日課になっていた。

前なら絶対に着なかった、痴女みたいな、痴女そのものの服で、

男の人の劣情を集めて、声を掛ける。

今のところ、一人だって断ってはこない。

「ほら……はやく挿入したくないですか？

私のオマンコ、名器だってみんな言いますよ？

今だって、外でみんなにエッチな目で見られて、

あなたにおっぱい揉まれて、

トロットロになっちゃってますよお♡」



「んうううっ♡
童貞チンポキたああっ♡」



「ああんっ♡
んんんっ♡」

「くっ……エロすぎだろ、この、淫乱っ!」

苛立ちをぶつけるように、抽送がはじまる。

技巧もなにもない、乱暴な抽送。

だけど——それでいい。

上手くなんてなくても、欲望が伝わってくる。

下劣な欲望に穢されて犯されること自体が気持ちいい。



「ダメだった、もう射精するっ！」

「射精してっ♡」

射精してえっ♡

マゾメスの子宮っ、

会ったばかりの童貞ザーメンっばら注らでえっ♡」



チゅゅ

っ

っ

っ

こんなキモチイイト、
やめられるわけがな。



「はあ……はあっ……!!
愛里紗ちゃんっ……!!」

荒い吐息のまま、私は寝室に押し込まれた。
綺麗に整えられた二人用のベッドに押し倒される。

「ちょっ……
おっ、お兄さん……なにをっ……」

血走った瞳が私の身体を舐めてゆく。
お兄さんはスポンからいきり勃った肉棒を取りだすと、
私の股にそれを割り込ませてきた。

#ニッ

「妹がいないってわかってて男の部屋に来たんだ。
愛里紗ちゃんだってこうゆうことを期待してたんでしょ？」

早口でまくし立てながら、服はただけさらされる。
慣れているとは言いがたい、
乱暴と気遣いの混ざった手つき。

「そんなん、ハッパ……」

ふるふるとう首を振って否定的意思を示す。



「こんなのっ、奥さんに悪いはず……」

ここは夫婦の寝室。

二人用のベッドの半分は、奥さんのためのスペースのはずだ。
そのことを指摘すると、お兄さんの血走った腫れた、
わずかに理性の色が戻った。

「そんなの、

僕だっつてわからないんだ。

こんな……自分が抑えられながらのなんて……。

こんな、いやらしいおっぱいを君が誘惑してきただっ！」



「私っ、そんなつもりじゃっ……
誰にも言いませんから、やめてくたさるら……」

言いつつも、本気の抵抗はしない。
もし本気で抵抗しても、相手は男で体格も全然違う。

「頼むよ……」回でい。
だから、だからっ！」

抵抗するフリをして、腰を揺する。
勃起した肉棒に、塗れた割れ目を擦ると、くちゅりと音が立つ。
蘇りかけた理性がまた消えて……。



「ん……」回だけ、うんわん。

強引に迫られて、仕方なく——
そう、思わせるように頷くと、
お兄さんの肉棒が、私の膣内へと突き込まれる。
とっくにぐちよぐちよの私の割れ目は、
お兄さんの肉棒を簡単に啜え込む。

ズ
ク
ユツ

ピ
ッ





「んっ——♡」

堪えきれず、声が出る。
そんな風で装って。

「ぐ、ち……」

「すっ、ら……寝具被さるん中……
こんなっ……」



私は、漏れそうになる笑いを必死に堪えていた。

(本当に——チヨロくて仕方ない♡)

こうなるように仕組んだのは私だった。

ご主人様にいただいた興奮剤でお兄さんの思考を緩ませておいて、いかにも清楚で、だげと隙の多い女を演じれば——このとおり。

もし私が拒絶していたら、きっとお兄さんは手を出してこなかった。一度未遂までいったら、自分の行為を反省して、もう会おうとはしてこなかったと思う。

だけど、お兄さんは我慢できなかった。だからもう——ゲームオーバー！

主人様ほどじゃないけれど、太さも長さも立派なそれを受け入れる。
どうすれば男を気持ちよくできるのかは、

仮想世界でも現実でも、数をきれいにほど繰り返して覚えてから。

「愛里紗ちゃん……動〜よ」

(あゝあ、結構立派なチンポなのだ、下っ手羨♥
私のことを気遣って腰振ってるんだもん♥)

この問答でシタ、ここでさせた軍兵くんの方がよっぽど上手い。

自分が気持ちよくなることだけを考えて、

相手のことは勝手に動く穴だと思って——使う。

それが女を一番気持ちよくさせる方法なのだ、

この相手はそれを知らない。



正義感が強くて、優しく、誠実で、妹や奥さんを大事にしている、男として赤点のお見さん。それを——壊す。

楽しみで、楽しみで、笑いを堪えられない。キュウ、と。

膣肉を収縮させて、お兄さんのチンポに抱きつく。男の気持ちの良い場所に膣肉を絡めて、理性を融かしてゆく。

「なんだ、これっ……アイツと、全然、違うっ……」

誘導するまでもなく、妻の感触と比較する。当たり前だ。

こんな夫と、いたとしてあと数人程度の経験しかない穴が、男たちに耕された私の穴と比較ものになるはずない。



「はあっ……愛里紗ちゃんっ！
射精るっ！」

愛里紗ちゃんの膣内に射精すよっ！」

「だめ、だめですっ♥
中はっ……そんなのっ……！」

口先だけの抵抗の言葉が、今のお兄さんに通じるわけがない。
だけど、そんな理性が残っているわけがない。
そんな自信を持って拒絶すると、
私を掴むお兄さんの手の力が増して――



「愛里紗ちゃんっ！ 愛里紗ちゃんっ！
ごめんっ！ でも、僕っ、ガマンできなからっー」

直後、私が許可を出す前に、お兄さんは射精する。

どくっ、どくどくどくどくっ！

随分と溜まっていたのか、濃厚な精液が私の膈内を満たしていく。



音が、聞こえる。
ピシ、ピシと、壊れる音。

誠実な、普通の女性が理想に思う男性像たるお兄さんが壊れていく。
夫婦の寝室で、嫌がる娘に腔内射精する。

薬の効果が抜けて、正気に戻っても、この背徳の快感は忘れられない。

私の身体を味わう法悦から、
女の身体を使う至福から、

お兄さんこのオネはもう——逃れることなんて、できない。





私がお兄さんと関係を持ちはじめたから、二ヶ月。
お兄さんは完全に私の身体の虜だった。

最初こそ、レイプ同然の自分の行為を後悔していたけど、
罪悪感を利用すれば、籠絡は簡単だった。

何度か抱かせて、そのたびに色んな快感を教えてあげた。
そのたびにお兄さんは私に依存してきて、
今では毎日、メッセージアプリで私の機嫌をとってくる。

「愛里紗様あ……」

捨てられかけた愛玩犬のような表情で、
お兄さんは私の割れ目に肉デイルドチポを擦りつけてくる。

私をご主人様の所有物マツメスであることも、

何のために私がお兄さんに近づいたのかも、

全部話して、本当の私を見せて。

それでもお兄さんは、それを誰にも話さなかった。





挿入の許可をねだってくる駄犬に、
焦らすよう腰を揺すって割れ目で撫で返す。

「この間メッセージしたアレ、
考えてくれましたか？」

「そ、それは……」

お兄さんの視線が罪悪感を帯びて逸らされる。
ただどその視線は私のおっぱいからは離れていない。

「まだそんな躊躇してるんですか？」

奥さんに黙って、毎日おねだりしてくるのには？」

「だって、それは……」

「あのときの動画があるから、ですか？」

ふふっ♡

最初はそうだったかもしれませんが、

今は違いますよね？」



「あんな動画なくっても、お兄さんは協力してくれますよね？」

「だって、お兄さんは家族なんかより、別の男に調教され尽くしたマゾメスに射精することの方が大事なんですもん♥」

ビキビキと、押し当てられた肉デインルドチが張りを増していく。

「このおっぱいも……」

おまんこも……

もうナシじゃいられないですよわ？」



こくん、こくんと頷くお兄さんの情けなさに、
私も我慢が限界だった。

「いいですよ。」

挿入れさせてあげます。

奥さんにはごめんなさいしましょうね」

「あ、ああ……」

ありがとうございます♡愛里紗様あつ♡

ごめん、ごめんっ……

もう、無理なんだっ……愛里紗様から、離れられないんだっ……!」



「んっ♡」

「今日も浮気セックスガマンできませんでしたね♡
いいですよ。腰振って♡」

「ありがとうございます♡」

「二月前まで良き夫で、良き兄で、
良き父でもあった駄犬は、
私の言葉ひとつで嬉しそうに腰を振り始める。」



「んっ♡ あんっ♡ はあっ♡」

たっぷりと仕込んだ甲斐あって、
お兄さんの腰使いはだいぶさまになっていた。

——穴のことなんて気遣っちゃダメ。

——自分が一番気持ちよくなるように壊しなさい。

——教えたとおりの乱暴な突き込みが、
マゾメスの私には一番キク。

ズッ

ズッ

ズッ



「んっ♡

もう一回っ♡

聞きますねっ♡

メッセしたアレ、

考えてくれましたがあんっ♡」

お兄さんは目を逸らして、

だけど腰の動きは加速させて、

「やり、ます……」

アチッ

アチッ



「なんですか？」

「小さくて聞こえませんでした」

「やりますっ……やりますからっ！」

大の大人が、

今にも泣き出しそうな表情で、

腰をへこへこさせながらおねだりしてくる。

「その言い方だと、私がお兄さんを脅してるみたいじゃないですか。

違いますよね？」

お兄さんは、この——」

ア
キ
ッ

グ
キ
ッ

キ
キ
ッ

「私の身体が味わいたいんでしょう？
娘さんを作ったこの寝室で、
妹の親友に浮気生膣内射精ナカダシしたいんですよね？」

お兄さんの顔に浮かぶのは罪悪感。

だけど表面上のものでしかない。

その証明に、私の教育しつけで随分と慣れてきた腰の動きは、

はじめてのときよりずっと激しく私のおまんこを責め立ててるし、

なにより立派な肉チンポデイルドポは、言われて膨らみをさらに増した。

ア
キ
ッ

グ
キ
ュ
ッ

ア
キ
ッ





「いいんですよ、別に。」

動画はありますけど、お兄さんが本当に嫌だって言うなら動画は消しますし、もう二度と会ったりしません。前みたいにお兄さんと、娘さんと、お幸せに♥」

その言葉に、お兄さんの顔面は蒼白に染まった。

この男はもう、私から離れられない。

私の媚肉を味わうためなら、どんなことだってするだろう。

大事な大事な、家族を対価に差し出してでも。

いやむしろ、そんな背徳こそ興奮を覚えるように仕上げた。

息を吸うのも忘れたのか、一瞬声を詰めてから、

「愛里紗様と、そのご主人様のために、
なんでもしますっ！
させてくださいっ！」

腰を振りながら、口にするまでもなく射精の許可をねだりつつ、

妻子持ちの優しいお兄さんは最低の誓いを口にする。


これで——できあがり♥

おまんこを餌になんだってする、都合の良い牡犬。

ア
キ
ッ

グ
キ
ュ
ッ

キ
ッ
キ
ッ



自分はマゾメスだったはずだけど、
私^{マゾメス}を理解^{わか}せられない弱いオスを支配するのは——気持ちいい。

自分が屈服して、隷属すること、
ご主人様にこの悦びを与えられていると思うと、
それだけで子宮が熱くなる。

この犬になにをさせようか。

悪事とは無縁の人生を送ってきたであろう、正義漢に。

ご主人様に仕込まれて、染められた邪悪なアイデアがいくつも浮かぶ。
だけど最初は——

「なんでもするっていうなら、
具体的に言ってくください。」

「お兄さんは何を……なんの手伝いをしたいんですか？」

その行為を想像したのか、突き上げる肉棒が勢いを増して、
ごくり、と。

お兄さんの喉が、重い唾を飲み込んだのが見えて。
罪悪感と期待の入り混じった、情けない顔で。

グ
干

”

グ
干

”

グ
干

”

グ
干
ユ

”

喉の奥から搾り出すような、懇願。

「妹をっ……空のことをっ……
愛里紗様のご主人様が……
レイプするの、手伝わせてくださらっ！」



「くすくすっ♡

悪いお兄さんですね……♡

でも、合格です♡

いいですよ。

お手伝い。のときのこと想像しながら、

妹の親友に浮気ザーメン注いでください♡」

グ
干
ッ

グ
干
ッ

グ
干
ッ

グ
干
ッ



「あ、ああっ♡

あああ♡

ありがとうございます♡

愛里紗様♡♡ 愛里紗様あ♡


どくどくっ、どぶどぶっ。

嫌がる妹を羽交い締めにして、

股を開かせる背徳を想像しているのか。

いつもよりも勢いよく、お兄さんの浮気ザーメンが流れ込んでくる。





優しげな顔立ちには、
妹の親友への膣内射精ナカダシの快感で蕩けていて、
どうしようもないくらい情けなくって。
それがどこか、空さんにも似ていて。

「ふふっ……♡
待たせてしまったってごめんなさい……♡
もうすぐですよ。空さん……♡」

溢れるくらい注がれた牝犬ベッコのザーメンを掬い取って、舐める。
正義感が強くて、気丈な彼女が堕ちていく様子を想像して。
子宮に広がる期待感に、私は絶頂を迎えた。